

## 涼しく(寒く)なって考える暑い夏



山本典弘(無名会)

先日(8月)『おそく起きた朝には……』というフジTV系列の番組で「熊谷(埼玉県)が暑いのは東京の熱気が海風で入っているからだ。東京の人は冷房を切れ」というような投書を取り上げていた。

ヒートアイランド現象が叫ばれて久しい。ヒートアイランド現象の気温の等温線を見ると、確かに都心と共に、熊谷あたりに“島(縞)”がある。ヒートアイランド現象の原因は冷房ばかりではないようだが、冷房がヒートアイランド現象を助長していることは確かであろう。

気象庁の発表(9/2)では、今年の6月~8月で、最高気温が30度以上の「真夏日」は、東京で平年より2週間多い53日、大阪では、過去最高と同じ70日になったそうである。今年は暑いと思っていたら、実際、暑かったのである。

ネットを見ていたら沖縄の宮古島の気温が載っていた。宮古島の真夏日の平均日数は、

(6月)16.9日間

(7月)27.2日間

(8月)24.6日間

だそうで、7~8月を合計してみると51.8日間である。今年の東京とそう変わらない。今年の大阪に至っては、6月分を加えた宮古島より多い。

また、別の気象庁データで、東京で30を超えた延べ時間数(年間)を比べてみると、

1980年 168時間

2000年 367時間

と、ここ20年で2倍を超えている。かなり暑くなっているということか。

また、今年の記録は見つからなかったが、最低気温が25°以上の熱帯夜(言葉を聞くだけで“暑い”)の日数をみても、東京では、1980年以降の20年で、

年間30日以上熱帯夜があった年が7年あり、内1999年には46日間、2000年は41日間あった。

1960年代には、熱帯夜は毎年10日間台しかなく、今の4分の1に過ぎず、大正時代に至っては年間1日あるか無いかだったようである。

また、東京だけでなく、北の仙台でも1980年代までほとんど熱帯夜はなかったが、1990年代に入り熱帯夜の発生が数日、見られるようになってきている。東京・大阪だけでなく都市全般で、ヒートアイランド現象が進行しているようである。

この暑さをなんとかならないか(しなければならぬ)かく言う、私は「超(死語か?!)暑がり+超汗かき」で、かつては一日中冷房がなければ生活できなかった。社会人となって初めての夏のボーナスで、まず窓用エアコンを買ったくらいである。

でも今の住処は、極めて風通しが良く、「同居人」が冷房嫌いなこともあり、ずっと「アイスノン((株)白元の登録商標)」と扇風機の生活を続けていた。

というのも、(受験生活で)土日も含めて昼間は家に居なかった(夜に帰って風呂入って寝る-朝御飯食べて出かける、そんな生活だったので)家での暑さを感じなかった。逆に昼間は冷房漬けだったが……。

ところが、受験生活が終わり、夜も割と早い時間に帰宅して、また土日の昼間に家で生活する時間が出てくると、“日当たり満点”の我が家は、これが“暑い!”。昨年ついに、エアコンを買ってしまったのである。

買ったは良いが、夜中に暑いといっちはエアコンを付け、吹き出す風が冷たいといってエアコンを切り、結構面倒な代物である。丁度良い環境は、難しい。夜中には、「寒い」「暑い」の格闘になる。

そもそも、家庭用のエアコンは、大雑把な機械である。吹出口からクーリングコイルを通った冷たい空気を吐きだして、熱負荷（暑い室温、人間）を消費して、暖められた空気を吸込口から吹き、また冷やして吹出口へ。吸込口に温度センサーがあり、吸い込む空気が設定温度以上ならば、コンプレッサーを作動させて、クーリングコイルを冷やす、設定温度より低くなれば、コンプレッサーを止めてクーリングコイルの冷やしを止めて、送風だけ。つまり、コンプレッサーを ON-OFF しているだけである。吹き出す風の温度はほとんど制御されていない（はずである）。

結局、今年の夏後半は、夏風邪を引いたこともあり、またアイスノン生活に戻った。やはり、熟睡できる。毎朝洗って冷凍室に入れるのは面倒であるが。もっとも、本誌がお手元に届く頃には、そんな格闘もとうに終わっている。

ヒートアイランド現象の原因として、環境省では、

緑地、水面等の減少による蒸発効果の減少、舗装面や建物が増えて土の面が減ることによる熱吸収が減り・蓄熱が増大したこと、  
建物・事業活動・自動車から人工排熱の増加 - いわゆるエアコン等の排熱（そう言えば地下鉄も涼しくなった）が増加したこと、  
建物の並びが無秩序になり路地が減り、いわゆる“風の道”がなくなったこと、  
を挙げている。

エアコンの影響は少なくない。

地球温暖化が100年で0.6～0.7 の長期的課題であるのに対して、ヒートアイランド現象が20年で、0.4～0.6 上昇する短期的緊急課題と言っている人々もいる。

窓をあければ、隣家のエアコンの室外機の熱風が吹き込むような都会の環境ですが、来年は、少なくとも夜間は「せーのハイ」で、みんな一斉に冷房を止めて、夏を乗り切ってみましょう。自分勝手ですが、昼間の冷房は大目に見てもらおう。

（終わり）